



熊本地震を振り返って 地震・災害に遭遇したら・・・

まだ記憶に新しい熊本地震、激しい揺れで多くの病院が被災しました。停電や断水、ライフラインなどが切断し、透析治療が困難になる病院も続出しました。地震に遭遇したらどうしたよいか、災害地拠点病院として多くの患者さんを受け入れた済生会熊本病院の副島一晃先生と井上浩伸先生に、熊本地震を振り返り注意点をおしえていただきました。

済生会熊本病院 腎臓科部長 副島 一晃 先生
腎臓科医長 井上 浩伸 先生

熊本地震を振り返って

腎臓科部長 副島 一晃 先生

日本は地震国でこれまで幾度となく大震災を経験してきました。そのような経験から各透析施設で災害対策マニュアルの作成や災害訓練などいろいろな災害対策が行われていることと思います。

2016年4月14日21時26分、熊本地方を震源とする震度7の大地震が発生したことはご存知かと思います。この日は木曜日で多くの病院・クリニックとも透析治療は施行していない時間帯で前震が起きました。この前震で被災し透析不能となった施設はほとんどなく、透析室も壁のひび割れが主な被害で、4月15日の透析はほぼ通常通り行うことができました。

そして、まだ前震の後片付けに忙しくしているなか、4月16日深夜1時25分にマグニチュード7.3の本震が発生し、熊本市を中心に多くの透析施設が被災し、断水で水の供給が途絶え透析治療が不能となった施設が多数にのぼりました。本震では当院も被災し、貯水槽にひびが入り給水能力が半分になる被害を受けましたが、透析室への水供給は可能で透析室はほぼフル稼働可能な状況でした。近隣施設からの情報が入るにつれ、当院が透析不能となった施設から多くの数の患者さんを受け入れ透析医療を提供しなければいけないことは明らかでした。

透析には大量の水が必要なので、今回のような震災に直面し水不足が懸念される状況では通常の透析治療は受けられません。限られた水・医療資源で、できる限り多くの患者さんに透析医療を提供することが最優先となります。透析時間の短縮と透析液流量の制限が必要で、4月16日の透析室がまさにそのような状況でした。透析時間を2時間、透析液流量を60%として節水に努め、可能な限り多くの患者さんを受け入れられる体制としました。

停電の復旧、物資の支援、透析施設への給水など復旧がすすみ、受け入れ透析患者数も徐々に減少し透析室も10日ほどでほぼ通常の透析スケジュールにもどり、振り返れば223名の患者さんを受け入れ透析を提供していました。被災しているにもかかわらず頑張ってくれたスタッフの努力、患者さんの協力、お互いを思いやる気持ちの大切さを実感した日々でした。

当院は災害拠点病院でもあり、今回の地震に際し全国の医療施設から物心両面の多くの支援をいただきました。この紙面をお借りし御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

熊本地震はいずれも通常多くの施設で血液透析を行なっていない時間帯で発生しましたが、腹膜透析（CAPD）においては、自動腹膜透析（APD）の患者さんや眠前のバッグ交換中の患者さんがおられました。ご自宅等で大地震に遭ったとき、透析患者さんに必ずしてもらいたいことを3つに絞り、お話することにします。



もし大地震に遭遇したら、

- ① 腹膜透析施行中なら地震が収まった後、速やかにいつもの手順で切り離すこと
- ② 現在の状況を速やかに透析施設に連絡すること
- ③ 普段以上に食事療法を励行すること

① 腹膜透析施行中なら地震が収まった後、速やかにいつもの手順で切り離すこと

火事や津波の到来など生命の危機に一刻も争う状況以外は、いつもの手順を守って安全にバッグを切り離し、身の安全を図ってください。注排液の途中でも大丈夫です。もし持ち出せるなら半日分の透析液と交換に必要な器材と機器だけでまずはOK、無理なら置き去りで構いません。

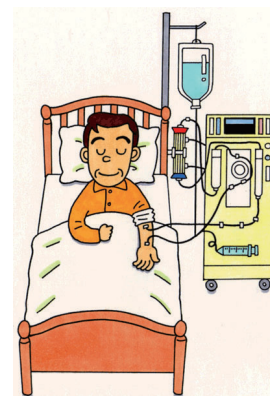
② 現在の状況を速やかに透析施設に連絡すること

深夜であれば翌朝でも構いませんが、安否確認のための連絡を必ずお願いします。これは血液透析・腹膜透析とも、震災後の対応がとても重要だからです。震災後、いつものように血液透析が受けられるとは限りません。患者さんの無事を確認する目的だけでなく、各透析施設の被災状況に応じて指示に従い行動していただく必要があります。熊本地震では当院は受け入れ側の病院として各施設からの迅速かつ的確な患者情報を元に、透析スケジュールやベッド配置を早急に組み、何とか対応出来ました。震災時には患者さんお一人お一人の協力も不可欠なのです。

一方でCAPD患者さんの安否確認には各社のコールサービスにても行います。日本中どこへ避難するにしても、避難先での速やかなCAPD継続が可能なシステムになっています。その観点からは、CAPDは災害に強い治療といえるでしょう。

③ 普段以上に食事療法を励行すること

震災直後の血液透析は限られた透析機器とベッド数のため、透析時間を短縮して行わざるを得ませんでした。また一部のCAPD患者さんには交換回数を減らして対応してもらいました。地震が大きければその影響が深刻・長期化することも想定されますが、その時の食料や水不足などの心配より透析医療を十分に提供できないリスクの方が遥かに高いものです。非常時は普段以上に体重増加やカリウム制限に注意することが大切です。



なお血液透析施行中に災害が発生した場合、各透析施設で対応の仕方や手順などが決めています。各自冷静かつ適切な対処ができるように、今のうちからしっかり確認しておきましょう。

保存期の方

保存期の患者さんにおいても食事の注意点は前述に準じますが、避難の際は、内服薬とお薬手帳の携帯をお願いします。負傷や疾病で避難先での医療を受ける際、診察だけでは腎不全の程度や有無は分かりません。治療には薬の用量調節を要するため、最新の検査結果も手帳とともに携帯するようしておけば万全です。